英語学点描（４）

久保田　正人

本稿は2009年の言語教育センター公開講座「不思議な英語表現」で取り上げた項目のうち、やや立ち入った内容のものをいくつか選んで綴ったものである。本稿にまとめるにあたっては、いずれの項目も、その後の研究で進展した内容を盛り込んである。本稿はこれまでの「英語学点描」の連載と同じく、英語科の先生方および一般の英語学習者でもっと深く英語を学びたいと願っている方々を念頭に執筆したものである。

2009年度の公開講座は英語史に深く関わる問題を取り上げた 。そのため、フランス語とドイツ語の専門家の支援が不可欠であった。泉利明氏（フランス文学）と田中慎氏（ドイツ語学）には最大限のご協力をいただき、豊かで多角的な内容の講座となった。また、完成稿を作成するにあたって、泉氏と田端敏幸氏（音韻論）および『言語文化論叢』の査読委員から有益な助言を受けた。記して謝意を表する。

１．英語におけるフランス語の影響について

英語におけるフランス語の影響については、あらためて取り上げる必要もないほどであるが、若干、考察を加えておいてもよいと思われる項目もあるので、そのことを簡単に記すことにする。

まず背景的なことがらを簡単に述べてみることにしよう。

英国では10世紀ごろから上級階級のことばはフランス語であった。ただ、土着の貴族もあったから、英語も通用していた。ところが、1066年のノルマン人による征服以降は、上流階級は大陸からやってきた貴族と入れ替わり、ことばも完全にフランス語となった。そのため英国は一時フランス語と英語の完全分離社会になった。しかし、下層民が主人のことばを覚えないわけにはいかず、また貴族も代を重ねるにつれて土着化していったので、100年も経つと、二ヶ国語常用が、少なくとも社会の一部では、ふつうのこととなった。もっといえば、少し前までは「フランス語を知っていること」が社会的なステータスであったのが、このころになると上流階級でも「英語を知っていること」が英国で暮らしていけるかどうかの試金石になっていた。

14世紀になると英国に住む人々で英語が話せない人はいなかったようである。かといって、フランス語が捨てられたわけではなく、文化・芸術の分野では依然としてフランス的な要素の威光は大きかった。そのかぎりで（ということは、日常語としてではなく外国語として）フランス語は英国社会の一部にとどまっていたといえる。

フランス語の浸透ぶりは、英語の語彙に占める割合を見れば一目瞭然である。英語の語

彙は、ゲルマン語由来の語が35％、フランス語が55％、その他の外来語が10％を占めている。語彙の面で英語は完全に二重言語である[1]。

このことに関連して、英語の語彙数が他の言語に比べて異常に多いということも注目しておいてよいことであると思われる。常用語にかぎっても、フランス語は約9万語、ドイツ語は約7万語であるのにたいして、英語は約19万語である[2]。

そのからくりはどうなっているのかというと、品詞ごとに由来の異なる語を用いている点がもっとも大きな要因として挙げられる。次の（1）を見てみることにしよう。(F) はフランス語由来の語、(L) はラテン語由来の語である。

（1） 品詞ごとに由来の異なる語

名詞―形容詞：town―urban（F)、house―domestic（F)、mind―mental（L)、mouth―oral（L)、moon―lunar（L)、tooth―dental（L)

名詞―動詞：stone―to petrify（石化する)(L)

動詞―名詞：to owe（借りている)―debt（借金)(F)

（1）において、各対の左側の語彙はすべてゲルマン語に由来するものである。一般的には、ある語の品詞を変える場合は、たとえばkind, kindly, kindnessのように、基本となる要素の形を残しながら全体としての形を変えることで実現させることが多いが、（1）の例は、品詞別に語彙をそっくり外来語に置き換えているから、それだけ語彙数も多くなるわけである。

そのほか、フランス語の構文を直訳したり、

（2） Cela va sans dire. > That goes without saying.

形容詞と名詞の語順を名詞＋形容詞にしたり、

（3） sum total（合計)、time immemorial（太古）

間接目的語の表示に前置詞を使ったり、

（4） I gave my ticket to the man.（I gave the man my ticket. が英語本来の形）

---

[1] この統計は語彙の出自で色分けしたものであり、たとえば使用頻度など、別の基準にもとづくと、ゲルマン語系の語彙の百分率は70％を下回らないほど圧倒的に高い数値を出すと言われている。その点からすれば、英語は静的にはフランス語との混合言語の様相を呈しているが、動的にはまぎれもなくゲルマン語であることを示している。

[2] Fernand Mossé（1958）*Esquisse d'une Histoire de la Langue Anglaise*, IAC.（郡司利男・岡田尚（訳）『英語史概説』、開拓社、p. 195）なお、ここでは複合語は勘定に入れていない。複合語を含めると、英語は約240,000語、ドイツ語は約180,000語になる。

属格を of で表現したり

（5） the love of a mother for her child（a mother's love for her child が英語本来の形）

なども、フランス語を模倣したものである。

以上が英語におけるフランス語の普及の概要である。

このような実情をふまえて、フランス語が英語において特異な位置を占めている領域について見てみることにしたい。それは動物とその食肉を表す語彙である。次の（6）を見てみることにしよう。

（6） ox—beef（牛）、calf—veal（仔 牛）、sheep—mutton（羊）、swine—pork（豚）、deer—venison（鹿）

いずれも左側が生きている動物を表す英語の語彙で、右側が食用となる肉を表すフランス語の語彙である。

その一方で、次の（7）のように、生きているときと食用になったときで語彙自体は変わらないものある。

（7） chicken—chicken（ニワトリ）、turkey—turkey（七面鳥）、pheasant—pheasant（キジ）、duck—duck（アヒル）

もちろんまったく区別がないわけではない。語彙自体は変わらないけれども、生きている動物を表す場合は不定冠詞を伴い、食肉になった場合は無冠詞になるなどのちがいがある。a chicken といえば生きているニワトリ、chicken といえばニワトリの肉の意である[3]。

ここで疑問が生ずる。なぜ、動物と、食卓にのぼったときのその動物の肉を表すのに、別々の語彙を用いる場合と、同じ語彙を用いる場合とに分かれたのか、ということである。たとえばこれがドイツ語であれば、Rind（牛）と Schwein（豚）が食肉となって食卓にのぼると、Rindfleisch（cow-flesh）、Schweinefleisch（pig-flesh）のように、生きているときの動物の呼び名を語の一部に継承するが、英語では語彙自体をそっくり入れ替えているのである。

radio のように当該の物体自体がそれまで存在していなかったような場合は、外来語をそのまま、あるいは少し改変して、取り込むことはある。radio は日本では「ラジオ」という語形で取り入れられた。television set は「テレビジョン・セット」ではなく「テレビ」という縮約形で日本語に取り入れられた。しかしながら、cow/ox などは語彙としては 9

[3] いわゆる「可算名詞」の条件に関する詳細な議論については久保田正人（2009）「英語学点描（2）」『言語文化論叢』（千葉大学言語教育センター）第 3 号、pp. 111-138 を参照。

世紀から存在しているから、ノルマン人による征服以前に英国に牛がいたことになる。牛がいれば牛肉もあったろう。それにもかかわらず、生きている動物の名前はそのまま土着語を用い続け、食肉を表す語だけが入れ替わったのである。

このことについて、家畜を育てるのは下層民だから英語で表現し、これを食するのはフランス系の王族・貴族であるからフランス語で表現した、というような民間説がある。が、それならば、なぜ、chicken は食肉になったとき poule にならなかったのだろう。なぜ、turkey は dindon/dinde にならなかったのだろう。どちらも王族・貴族の口に入らなかったということはないであろうに。というふうに考えていくと、このような説はそのままでは賛同しにくいということになってくるであろうと思われる。

この問題は、当時の英国人が、何を、どのように食べていたか、という点を考慮に入れなければならないだろう。

あらためて「牛、仔牛、羊、豚、鹿」と「ニワトリ、七面鳥、キジ、アヒル」を比べてみると、フランス語起源の語が食肉を表す語になったものはほとんどが「家畜」であり、そうでないのは「家禽」である[4]。

牛や豚は、屠殺してから食卓にのせるまでの間に、さまざまな処理と調理が必要であるのに対し、鳥は、締めて羽を取れば、焼いたり煮るなりして食べられる動物である。料理法としても、牛、豚などの方が、当然複雑であろう。だから、そうした肉は権力の側にいる人間にしか、あまり食べられなかったのではないかと想像される。また、「肉屋」というのは、特別の知識と技術が必要な専門職であるが、同時にその仕事の性格から、死刑執行人ほどではないにしても、多少は差別される職業であったようである（泉利明氏のご教示）。

そういうふうに考えていくと、動物としての家畜と、その食肉とは、位置づけが大きく離れていたという実態が想像されてくるように思われる。そのあいだを埋めるものは、「料理法」の存在である。家畜の処理法や肉の調理法を含む「料理法」全体の中に位置づけてこそ、食肉の名称も生きてくる。その点で、食肉用にあてがわれたフランス語は料理法とともに英国に入ってきたと考えると、いろいろなことが整合するように思われる。mutton（1290）、pork（1290）、beef（1300）、venison（1300）、veal（1386）はいずれもフランス語の借用が（ということはフランス文化が）すさまじい勢いで増していく 13 世紀から 14 世紀にかけて英語に取り入れられたものである。新しい語彙の導入は新しい文化の導入と並行的であると考えるべきものであると思われる。

それに対してニワトリやアヒルは、庶民でも庭で飼え、大きくなれば自分で処理して食べられるということから、「動物」と「食肉」の差があまりなかったものと想像される。そのような距離の近さが、異なる語彙を採用するに至らなかった背景であったのかもしれ

---

[4] 家禽ではないが、lamb（子羊）にも食肉を表すフランス語がない。sheep（成長した羊）に mutton があるのと対照的である。動物としての lamb の初出年は 725 年、ラム肉としての初出年は 1620 年である（1620 Venner *Via Recta* iii. 50 Lambe of two or three moneths old is the best. —OED）。mutton などの食肉と比べて 300 年以上遅れて登場している。

ない[5]。

2．綴り字と発音

現代英語は綴り字と発音が大きくずれているといわれる。抽象的なレベルではきわめて規則的なのであるが、歴史の偶然から不規則にずれている例もある。以下では、英語の学習者が一度は首をかしげたことがあると思われる数例を取り上げて、ずれの原因を解説することにする。

次の（８）の図は中期英語（11～16 世紀）における方言区分である。

（８） 中期英語の方言区分

Ⅴ　北部方言
Ⅳ　中部西方言
Ⅲ　中部東方言
Ⅱ　南部西方言
Ⅰ　南部東方言

この時期はロンドンやオクスフォード大学・ケンブリッジ大学を含む中部東方言地域（Ⅲ）が社会の中心であり、この地域の方言が標準語とされていた。ここで方言区分を取り上げたのは、綴り字と発音が大きくずれているものの中に、方言がからんでいるものがあるからである。

次の（９）の語彙を見てみることにしよう。

（９） busy, bury, any, many

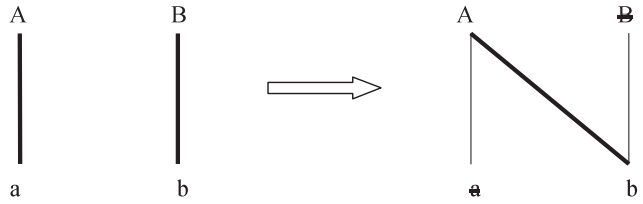
どれも基礎語彙であるが、busy は［bizi］、bury は［beri］、any/many は［eni/meni］と不思議な発音をする語彙でもある。これらはそのまま読めば busy［buzi］、bury［buri］、any/many［ani/mani］となってしかるべきはずのものである。それがどうして綴り字か

[5] なお、英国人が pheasant（キジ）や turkey（七面鳥）を食べるようになったのは、（語彙の初出年で見ると）16世紀以降のことである。

らは予測不可能な母音音価になっているのかというと、次のような事情による。それは、一つの語彙が２つの方言で異なる変異形となり、その後、一方の綴り字が消滅し、もう一方の発音が消滅し、それぞれに残った発音と綴り字が方言の壁を越えて結びついたのである。

この間の事情は言葉で説明されてもわかりにくいところがあるから、図で表してみることにしよう。

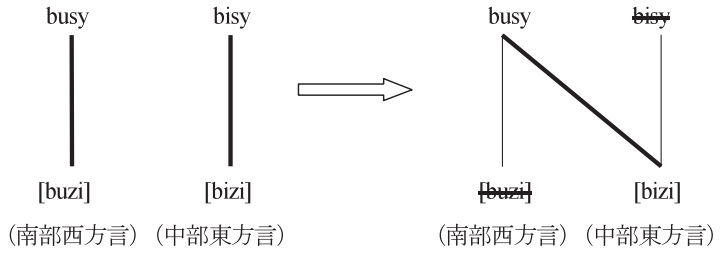
(10)



ＡとＢは、同一語の、２つの方言における変異形だとしよう。小文字のａとｂはそれぞれの発音であるとしよう。このような対が存在していたとき、矢印の右側の図のように、Ａ の綴り字に対応していた発音ａが消滅し、ｂの発音に対応していた綴り字のＢが消滅したとする。このままであればＡもｂも存在基盤を失って消え去る運命なのであるが、ここで、残されたもの同士が結びつくという現象が起こったのである。

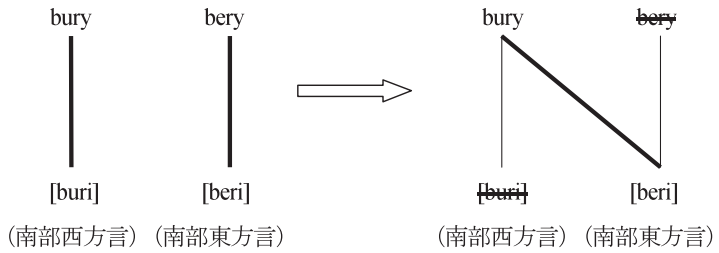
（９）の諸例を（10）と同じ形で、次の（11）に表示してみよう。

(11)　busy

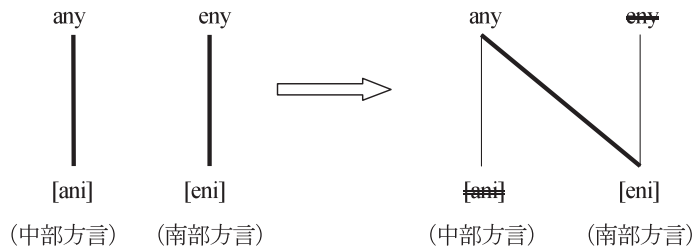


（南部西方言）（中部東方言）　　（南部西方言）（中部東方言）

busy



any

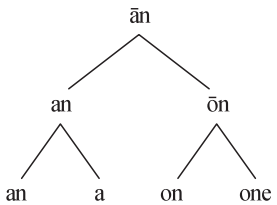


これが（９）の綴り字と発音のずれのからくりである。なお many は any の影響を受けたものである。

もうひとつ不思議な発音の語がある。one である。この綴り字からは［oun］（オウン）か［one］（オネ）のどちらかしか出てこないはずであるのに、［wʌn］という不思議な発音になっている。ただ、［wʌn］という発音は 18 世紀になって登場した新しい発音でもある。それまでは［oun］（オウン）であった。ここにも方言がからんでいる。

まず one の歴史を簡単にたどってみることにしよう。

(12)　oneの歴史



記録では、10 世紀ごろ、ān［a:n］という語があった。「任意の一つ」という意を表す語であった。やがて母音が短音化して an［an］となる系統と、母音音価が変わって ōn［o:n］となる系統に分かれた。an の系統はその後 n の落ちた弱形も加わり、an/a の 2 つに分化した。これが現在の不定冠詞である。不定冠詞は an が基本形である。一方、ōn の系統は、

発音が［oun］と二重母音化し、綴り字も on になるものと one になるものに分化した。on は現在単独では存在しておらず、only［ounli］にその姿を残している。また one の方は、alone/lonely などにその姿を残している。alone は all+one の縮約形で、「全部で一つ」ということで「一人きり」の意。lonely は alone の縮約形である lone に -ly が付いたもので、「さびしい」の意。どちらも「一人」の意の one が含まれている。いずれの語も one は［oun］という発音であった。数詞としての one も標準語では 17 世紀までは［oun］であった[6]。

このような変化と平行して、南部方言に次の 2 つの変化が起こった。

(13)　南部方言における音変化
　①　［ou］が［wou］になった
　②　ou>u>ʌ と短母音化が起こった

南部方言では、15 世紀ごろ、第 1 音節に［ou］があると、その直前に［w］が入るようになった。その結果、one は［woun］という発音になった（whole という語の綴り字もその名残である）。その後、ou > u > ʌ と短母音化が起こり、［woun］> ［wun］> ［wʌn］という発音の変化が生じた（18 世紀）。現在の［wʌn］はこれである。この南部方言の発音が標準英語に取り込まれて、現在、数詞や代名詞など、独立して用いられる one の用法のときだけ、［wʌn］という発音が用いられるようになっている。

綴り字と発音のズレといえば、もう一つ忘れてはならない語がある。women［wimin］である。この語はもちろん woman の複数形であるが、woman と women は途中から歴史の推移が異なっている。

woman/women の綴り字と発音の変遷については、OED に代表される説と Jespersen（1909：84）[7] に代表される説がある。まず、この 2 つの語の綴り字を OED に記録されている年代順に並べてみることにしよう。

(14)　woman/womenの綴り字の変遷
　　wīfman → wimman → wumman → womman → woman
　　wīfmen → wimmen → wummen → wommen → women

woman の元々の形は wīfman であり、複数形は wīfmen であった。man/men の変化は現在の英語の man/men と同じである[8]。この語は wīf（女性）＋man（人）ということで、「女

[6] 現代イギリス英語では［ou］の発音が姿を消し、すべて［əu］に代わった。［ou］はアメリカ英語にのみ残っている。
[7] O. Jespersen（1909）*A Modern English Grammar, Part I*, George Allen & Unwin Ltd.
[8] men という複数形は man に複数語尾の -es が付いた形に由来する。つまりもともとは manes というような形であったのだが、/a/が/e/に同化して menes となった後、複数語尾の -es が落ちて men という形が残ったものである。men はこれ自体が複数形だったのではなく、複数形の残骸なのである。

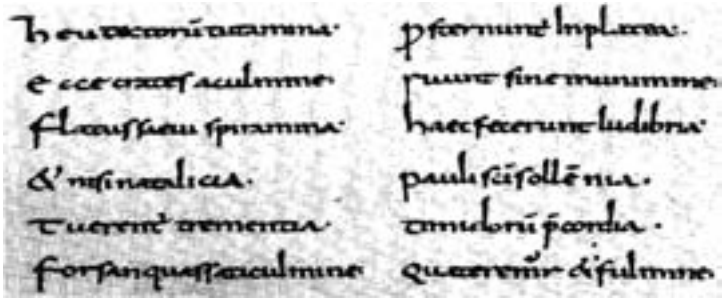
の人」の意である。やがて（lēofman > lemman > leman（愛する人）などのように）長母音が短母音化し、それと平行して、直後の -fm- が -mm- になるという一般的な変化をこうむって、wimman/wimmen となった。13 世紀になって、語頭の［wi］が［wu］となる。これに対応して綴り字も wumman/wummen になった。

ところが、その後、u の文字に代わって o の文字が用いられるようになり、womman/wommen と綴られた。なぜ u の文字が外されて o が用いられたかというと、当時の筆記体文字の読みにくさに原因があったといわれている。

文字はその形から 2 つの種類のものに分けられる。縦線に特徴のある文字と横線に特徴のある文字である。縦線に特徴のある文字は横から読むことで視線が字画と直角に交わり、認識が容易になる。アルファベットはこの種の文字であり、アルファベットが横書きされるのはこのためである。横線に特徴のある文字（たとえば漢字など）は上から下へと縦に読むことで視線が字画と直角に交わり、認識が容易になる。漢字の文章がもともとは縦書きで始まったのはこの理由による[9]。

英国で印刷術が普及し始めるのは 15 世紀である。それ以前は手書きの筆写であった。しかし、できるだけ簡略して書くために、i, l のように縦線一本からなる文字だけではなく、w, m, n, v, u のような文字も縦線だけで済ませることが多かった。そのような状況で、wumman/wummen を手書きするとどうなるかというと、縦線が 10 数本並んでいるだけにしかみえないのである。当然、語の識別がむずかしくなる。これを minim confusion（縦線混乱）という。次に挙げるのはラテン語の文章の手書きであるが、これと同じことが英語の文章にも生じたのである。

（15）　ラテン語におけるminim confusion[10]



このため、母音の部分を読みやすくして語全体の視認性を増す工夫が考えられた。u という母音字に代わって、w と m に挟まれた位置でも［u］と読めるわかりやすい母音字を

[9] 外山滋比古（1990）『増補新版　ことばの姿』、芸術新聞社、pp. 5 –22を参照。
[10] David Crystal（2003）*The Cambridge Encyclopedia of the English Language*（second edition）, Cambridge University Press, p. 261.

探したのである。そこで採用されたのが、フランス系の写本筆写士によってもたらされたフランス式の綴り字法であった。当時の写本は、ごくわずかな自筆写本を除くと、原著者とは異なる方言話者の写本筆写士によって模写されるのが一般的であり[11]、英語の知識に乏しいフランス系写本筆写士にあっては、英語音をフランス式の綴りに置き換える傾向が顕著であった。もちろん o という文字自体を［u］と読むわけではないが、現代フランス語では ou を［u］と読み、中世フランス語では、たとえば convent（僧院）の on を［u］と発音するなど[12]、o は一定の音あるいは文字と組み合わさると［u］の音と結びつきやすくなる。当時のフランス系写本筆写士にあっても、wum- の発音を変えずに、読みにくさを解消できる文字として、o を考えたであろうことは容易に想像できる（もちろんこれによって英語の正字法を混乱させる結果になったが）[13]。

OED の記録では 1275 年に womman という綴り字が登場する。もちろん、o と書いても発音は［u］であったから、womman と綴っても［wumman］と読んでいた。love や come の o も同じ理由で u から置き換えられたものである[14]。一方、wommen という綴り字が登場したのは womman より 100 年以上遅れた 1386 年である。この複数名詞に関しては、なにかの理由で、u → o の文字の置き換えに抵抗があったらしい。

その後、foot/feet などにみられる［u]-[i］の単数複数の対立が意識されるようになり、womman はそのまま［wu-］と発音される一方で、wommen は［wi-］と発音されるようになった。それと並行して -mm- の綴り字が簡略化されて woman/women の綴り字が生まれた。途中で入れ替えられた o という文字はそのままにして、発音がさらに変わった結果が、現在の women という綴り字と［wimin］という発音の組み合わせである[15]。

以上が比較的詳しい注釈を加えた、OED 説の概略である。

一方、同じ事象に Jespersen（1909：84 , 264）は異なる解釈を加えている。イエスペル

---

[11] 中尾俊夫（1972）『英語史Ⅱ』（「英語学大系」第 9 巻、大修館）、p. 19.

[12] Urban T. Holmes and Alexander H. Schutz（1938）*A History of the French Language*, Farrar & Rinehart, p. 57（松原秀一（訳）『フランス語の歴史』（大修館））なお convent は現在 couvent と綴られている。

[13] フランス系写本筆写士たちは、minim confusion のないところでは、［ö］にも o の文字を当てていたようである。たとえば *Poema Morale* や *The Owl and the Nightingale* のような12 世紀の写本に、soþþen ‘since’、hovene ‘heaven’、sovene ‘seven’、horte ‘heart’ のような綴り字が見える。Fernand Mossé（1952）*A Handbook of Middle English*, Johns Hopkins Press, pp. 10–11 を参照。

[14] love や come の［u］は現在［ʌ］になっているが、［u］→［ʌ］の変化は lufe（=love）や cuman（=come）のように OE のときから u であった語に限定された音変化である。wumman の場合は 13 世紀になって wi→wu になったものであり、そのため［ʌ］への変化の対象にはならず、［u］のままである。同じ綴り字でも語の出現年代のちがいによって特定の音変化を受けるものと受けないものがあることについては、久保田正人（2008）「英語学点描」『言語文化論叢』（千葉大学言語教育センター）第 2 号、p. 18–19 を参照。

[15] womenの-menが［min］と発音されることについては、直前の強勢音節に［i］があると、その直後の音節の e が一種の母音調和によって［i］になったためであるという主張もある（cf. O. Jespersen（1909）*A Modern English Grammar, Part I*, George Allen & Unwin Ltd. p.264）。たしかに、chicken［tʃikin］, kitchen［kitʃin］, linden［lindin］, linen［linin］などの en が［in］と発音されることから、womenの語末の［-in］もこれと同類とみることができる。

センは、語頭の［wi］が［wu］になったのは、-man の後舌母音［a］に引かれた結果であり、複数形の wimmen の場合は、後続する音節の母音が前舌母音［e］であるから後舌音化は起こらなかったとしている。つまり wimmen の語頭の発音はずっと［wi］のままであったというのである。

ところが、OED に記録されているすべての用例を観察してみると、複数形に wummen という綴り字が見出されるのである。この綴り字は 1205 年から 1240 年までに次の 4 例を数える。

(16) a. 1205 Lay. 11718 Æc heo nomen wummen wunder ane monie.
b. 1225 *Ancr. R.* 58 Þis is a swuðe dredlich word to wummen þet scheaweð hire to wepmones eien.
c. 1240 Ureisun in *O.E. Hom.* I. 191 Þu ert briht and blisful ouer alle wummen.
d. *Cursor M.* 23451（Gött.）Man［has］gret liking. On wummen fair for to bihald.

wummen という綴り字の存在は何を意味するかというと、この綴り字が発音を正確に反映しているということであるならば、［wi］→［wu］のプロセスが後続要素とはかかわりなく存在したということである。そのかぎりで、イエスペルセンの後続母音説には中核部分に未解決の問題が含まれていることになる。

ただ、OED の説にも問題がないわけではない。いったん wummen になり、それから綴り字の読みにくさを補うためにフランス式の綴り字を援用したとしても、現在の women の発音は［wimin］であるから、第一音節の［u］がどこかの段階で［i］に戻ったことになる。これについて OED は foot/feet などにみられる［u］-［i］の単数複数の音交替に影響されたのだろうとしているが、この説明はいささかこじつけに近いように思われる。foot/feet などは母音の交替以外に単数複数を区別する目印はないが、womman/wommen は語頭音節の母音の交替に訴えなくとも、語末の -man/-men でその区別が可能だったからである。しかも、現在の［i］は当初の［i］とは出自が異なるというのであるから、つじつま合わせの感をぬぐいきれない。

OED 説は（16）に示したような綴り字が発音に忠実であったことを前提としているが、記録上、wummen が登場する直前と直後の時期の綴り字を見てみると、wimmannen（1200）—wummen（1205-1240）—wimmen（1290）となっており、広めに見積もってもわずか 90 年で［i］に戻っている。このことは、wummen という綴り字がじつは［wimmen］と発音されていたのではないかと疑わせるのである。また、上で指摘したように、womman と wommen の綴り字の登場にあたっては、wommen の方が一世紀以上も遅れている。これも、wummen に［wimmen］という発音があり、フランス式の綴り方をもってしても、［i］を o で表記するには相当の無理があったからではないかということであるならば、一応の説明もつく。

OED の方は、語頭音節の母音音価が変化したと想定するためにかなり強引なつじつま合わせが必要となり、イエスペルセンの方は、短期間ながら存在していた wummen という綴り字が［wimmen］と読まれていたことを示す証拠が必要になる。それぞれに重要な点で克服すべき問題を抱えているが、整合性の点からみると、未発見の資料を必要とするとはいえ、イエスペルセンの説の方が筋が通っているという印象を受ける。

3．英語における品詞の転換について

英語における品詞は、当該の語が文構造のどこに配置されるかによって定義されるもので、語それ自体に本来的に備わっているものではない。名詞は、主語、目的語の位置に配置された語のレッテルであり、形容詞は典型的には名詞を修飾する位置に配置された語のレッテルである。また副詞は名詞以外の語句を修飾する語のレッテルである。品詞の分類は、文の的確な解釈に資するかぎりで有効であり、それ以上に価値のあるものではない。John is as tall as Bill. のような文において最初の as の品詞は何か、２番目の as の品詞は何かというような問題は、それを分類することでこの文の解釈に資するならば有効であるが、そうでないならば、学習者にとって不急不要の知識でしかない。

品詞が構造上の位置によって定められる概念であるというのはそれでよいとして、それでも、特定の語は特定の品詞で用いられる頻度が高いということも事実である。たとえば John という語は、100％とは言わないまでも、名詞として用いられることがほとんどであろう。そのかぎりで特定の語の定義に品詞情報を加えることは学習の便宜上有効である。

品詞が構造上の配置によって定義されるものであるということに関して、次のような例が持ち出されることがある。

(16)　But me no buts.（「でも」「でも」と話の腰を折るな）（Henry Fielding, *Rape upon Rape*（1730））

この文では文頭の But が動詞として用いられており、文末の buts は名詞として用いられている。どうしてそのような解釈が生まれるかというと次のような推論にもとづく。

(17)　①文末の but に付いている s は名詞の複数形語尾の可能性と動詞の三人称単数語尾の可能性があるが、直前に noという語があるところから、これと組み合わさるのは複数名詞と判定される。
②me は名詞句として用いられる頻度が高い。
③名詞句が句読点を介在することなく２つ連続して生ずる位置は、英語には２つしかない。<u>the book John</u> bought yesterday のように関係詞節の先行詞と主語である場合と、John gave <u>me a book.</u> のように二重目的語が並んだ場合である。me no buts はどちらに該当するかというと、代名詞は、通例、関係詞節の先行詞になることがなく、また関係詞節も後続していないことから、二重目的語の連続と

して解釈される。

④文頭の But は二重目的語をとる品詞、つまり（授与）動詞である。

⑤この文は、But を動詞とする命令文である。

このような例は、特段、例外的なものではない。英語における品詞は構造上の配置によって決まるものであるという基本的な性質をそのまま反映しただけのことである。

このことを踏まえて、次の（18）の文を見てみることにしよう。

（18） I'm afraid this sudden wet weather has put paid to our garden party.（この突然の雨で園遊会もどうやらおじゃんだ）

この文は安藤（2005：748）[16] に掲載されているものである。ここで put paid to という表現に注目したい。安藤（2005）はこの paid を「過去分詞」として分類している。put ____to という環境に生ずる paid を過去分詞だというのである。「過去分詞」という「品詞」は、「過去」とは関係がなく、be____や have____のような位置に生ずる品詞のことをいう。しかし、put____to という環境に生ずる要素を「過去分詞」（つまり動詞の一種）と分類するのは妥当でないと思われる。

put paid to という表現は、もともとは put "PAID" to が本来の形である。「支払い済み」の印として、PAID の判を領収書に押す（put）ことに由来する会計用語である。

（19） PAIDと押された領収書

その「支払い済み」あるいは「終了」の意が拡大され、引用符もとれ、PAID も小文字になって、慣用句となったものが、put paid to である。したがって、この paid は、形態からいえば受動態の分詞であるが、put という動詞の目的語の位置に配置されているという点からすれば、「名詞」と分類されるべきものである。

[16] 安藤貞雄（2005）『現代英文法講義』、開拓社.

このように、本来なら別の位置で用いられる語形を、いわばカプセルに閉じこめて、名詞の位置に配置して用いたものを「引用実詞」という。引用実詞は名詞が配置される位置に配置されて用いられるので、名詞として分類される。したがって put paid to は「動詞＋過去分詞＋前置詞」の構文と分類されるものでなく、paid を「過去分詞」と言うなら、この構文では「過去分詞の形をした名詞」と言うべきものである。

冒頭でも述べたように、品詞の分類は、それを分類分けすることによって文の理解に資するというかぎりにおいて有効なものである。(18) の文における paid を「過去分詞」と分類するより「名詞」と分類するほうが、より深くこの表現の意味の理解に資すると思われる。

ところで、英語のおいて引用実詞はかなり頻繁に用いられる。次の (20) の文を見てみることにしよう。

(20) Over the fence is a homerun.

この文は、野球のルールを話し合っているという文脈で登場するものであると想定しよう。そのとき、打ったボールが垣根を超えたらどうするかという発言（あるいはだれもが考える意識）を受けて、「『垣根を越えたら』（か、その場合は）ホームランだ」というのが、この文の意味である。この場合、over the fence は、たとえば She spent so much of her time craning over the fence.（彼女は日がな一日垣根越しにお隣さんを覗いていた）というような文では crane という動詞を修飾しているから副詞として分類されるが、(20) のような文では引用実施つまり名詞として分類される[17]。

さらに次のような、一見、前置詞が副詞節を従えているようにみえる例もある。

(21) The theory I think came closest was the one put forward by Ruth. “They're telling us about sex <u>for after we leave Hailsham</u>,” she said. “They want us to do it properly, with someone we like and without getting diseases. But they really meant it <u>for after we leave</u>. They don't want us doing it here, because it's too much hassle for them.”（Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go*）[18]

ここで問題になるのは下線部の for after we leave（Hailsham）という表現である。名詞しかとれないはずの前置詞（for）が副詞節（after we leave（Hailsham））をとっているの

[17] 名詞句ではない範疇が主語の位置にあらわれた場合の理論的な考察については久保田正人（1981）「主語の位置に生ずる名詞句以外の主要句範疇の機能と有標性」『英語学』24, pp. 25–43を参照。

[18] 参考のために引用箇所の邦訳を挙げておこう。「わたし自身は、ルースの説が一番正しいように思いました。『保護官が言っているのは、わたしたちがヘールシャムを出たあとのことよ。外に出たら、病気をもらわない範囲で、どうぞ楽しんでね。でもそれはヘールシャムを出てからのことよ。ヘールシャムの中ではダメ。いろいろと煩わしいことが増えるから。』というのがルースの意見でした。」（カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』土屋政雄訳、ハヤカワ epi 文庫）

である。この表現は全体として「ヘールシャムを出たあとの期間における（おいて）」というほどの意で用いられている。この場合、主人公たちがヘールシャムという場所に隔離され、そこを出たあとのことを不安視していることが “after we leave（Hailsham）” という表現で表されている。局所的に見るならばこの表現は副詞節であり、副詞節ならば前置詞（for）の目的語にはならないはずである。そうすると、前置詞の目的語として生じているかぎりにおいて、after we leave（Hailsham）という表現は、たとえ長くても名詞扱い、つまり引用実詞であることになる。主人公たちはこの表現で表される事態を頻繁に口にし、いつも懸念していた。主人公たちの意識にはつねに “after we leave（Hailsham）” という言葉があったのである[19]。

4．work from homeという表現について

work from home という表現がある。比較的新しい表現で、OED は次の（22）に挙げる 2000 年と 2001 年の用例を掲載している。

（22） a．2000 Sunday Herald（Glasgow）16 Apr.（Seven Days section）1/1 They work from home, hot-desk in pod-like offices, or just sit in cafes making deals and green-lighting projects.

b．I worked up a telecommuting package so I won’t be fishing that much less. I get to work from home on Fridays,’ said Fitzpatrick, making air quotes around ‘from home’ with his fingers.（2001 *Washington Post*（Electronic ed.）17 June）

この表現を取り上げるのは、work, from, home という見慣れた語彙から成る表現であることから、うっかり「家から仕事に出かける」と誤訳しやすいからである。この表現の意は、これまでなら会社で行う仕事を、家で行う、つまり「在宅勤務」ということである。いわゆる IT 機器の発達によって、必ずしも職場に出向かなくても在宅で同等の仕事ができる、そのような仕事の形式を表すのがこの表現である。

ところが、work from home を英米の辞典で直接見つけるのは容易ではない。たとえば OED の WORK の項を引いてもこの表現は出てこない。上掲の（22 a）の用例は HOT-DESK（v.）の項目にあり、（22 b）の用例は AIR（n.）の項目にある。

もう一つ、work from home が出てくる箇所がある。それは telecommute/teleworking の定義文の中である。次の（23）の定義文を見てみることにしよう。

---

[19] ここで問題にした表現について、英語をかなり流暢にあやつる日本人作家が書いたブロークンな英語ではないのかと疑念を持つ向きがあるやもしれない。念のために記すが、Kazuo Ishiguroは、王立文学協会賞、ウィットブレッド賞、そしてイギリス最高の文学賞「ブッカー賞」をも受賞した、日本生まれのイギリス人作家である。

(23) **telecommute**: to work from home (esp. at a traditionally office job), communicating with one's place of employment, colleagues, etc., by telephone line or data link; hence telecommuter; telecommuting (*OED*)

teleworking: working from home using equipment such as telephones, fax machines, and modems to contact people. (*COBUILD*)

どちらの語も比較的新しいものであるが、新しい語であってもその定義は既知の表現で表すしかなく、そうすると work from home という表現の組み合わせはある程度古くからあったものであることになるであろう。そのような表現が表立ったところに出ていないということは、とりたてて解説を要する特殊な表現として位置づけられているわけでもないということにほかならない。

ちなみに、『ジーニアス英和辞典』はこの表現を work の小項目に挙げてあり、英和辞典の行き届いた配慮をあらためて思い知らされる。

(24) work from home　自宅で仕事をする、在宅勤務をする

ここで最初の問題に戻ろう。work from home をはじめて見た英語学習者はこれを「家から仕事に出かける」の意であると誤解しやすい。この原因はどこにあるのだろうか。work「仕事をする」、from「から」、home「家」と単純につなげれば、たしかにそんな日本語になり、「在宅で仕事をする」というような日本語訳は出てこない。3つの表現をその本来の意味から洗い直してみると、work と home には特に問題になるところはないようである。つまずいているのは from であるらしい。

一般に from には「から」という日本語を当てることが多い。たとえば次の（25）の例を見てみることにしよう。

(25) a. I came from Japan.（日本から来ました）
b. The restaurant is open from 10 to 8.（開店時間は午前10時から午後8時です）

このような用例では、「から」という日本語を当ててもなにも問題はない。
ところが、これが行き過ぎるとこんな英作文の誤りを犯すことになる。

(26) a. 太陽は東から昇る
b. *The sun rises from the east.

もちろん The sun rises in the east. が正しい形であるが、（26 b）のような誤った英文を書く学習者は少なくない。そして、なぜ from ではいけないのか、その理由がわからな

い学習者も少なくないと想像される。

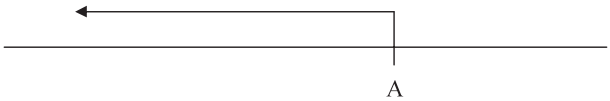
from の意味は何か。結論を先に述べれば、from の意味は、概略、次の（27）に示すような内容である。

（27）　fromの意味
　　起点より始まる継続した行為・状態

ここで重要なことが 2 点ある。まず、出発点「起点」があること。そして「そこで始まった行為なり状態が、起点から途切れることなく、〈継続〉していること」である。起点と継続の 2 つの概念があるところに from が用いられ、そのいずれかでも欠けている場合は from は用いられないということである。

これを図示すれば次の（28）のようになるであろう。A から出発した矢印の線分が切れていないところに注意されたい。

（28）　from A の意味



from の意味をいくつかの用例で確認してみよう。次の（29）の例文を見てみることにしよう。

（29）　a . Smoke was rising from the factory chimneys.
　　b . The river rises from a beautiful spring in the park.
　　c . We're open from 8 to 7 every day.

（29 a）は「工場の煙突から煙がのぼっていた」の意であるが、煙は煙突の排出口から、あたかも一本の筋のごとく「つながって」のぼっていたという風景である。（29 b）は「この川は公園の美しい泉に源を発している」の意である。この場合も、川の流れは源泉から切れずにつながっている。（29 c）は「開店時間は毎日 8 時から 7 時までです」の意であるが、注意すべきは open の品詞である。be 動詞の補語に用いられているのであるから、この open は形容詞である。つまり、「開店している」という状態を表しているものである。朝の 8 時に開店したら、その状態のままずっと夜の 7 時まで開店しているということである。たしかに、from には「起点」と「継続」が含まれていることが確認できる。

一方、次の（30）の例文を見てみることにしよう。

(30)　a．*We open from 8 to 7 every day.
　　b．*The sun rises from the east.

どちらの例文も英語としてなりたたない。(30 a) では open が動詞として用いられている。動詞としての open は完成動詞（achievement verbs）であり、ある状態が実現する瞬間を表す。そして、それ以降の継続は守備範囲の中にない。したがって、開く瞬間を表すのみであり、そこに時間概念を当てはめると、瞬間的な時間しか受け入れない。(30 a) は次の (31) のように変える以外にない。

(31)　We open at 8：00am (and close at 7：00pm).（店を開ける時刻は 8 時です。店を閉める時刻は 7 時です）

(30 b) の場合は、rise 自体が完成動詞であるのではないが、the sun rises と「日の出」の意で用いられる場合は、文全体の意味として瞬間的に完成する出来事を表すようになる[20]。日の出は、太陽が地平線なり水平線からのぼった瞬間を表すものだからである。したがって、瞬間的に起こり瞬間的に終わるものに from は使えないということになる。

ちなみに、(30 b) の正しい形は前置詞に in を用いるものである。なぜ in が用いられるかというと、この文は太陽自体に焦点があるのではなく、「日の出が起こる方角」を問題にしているからである。この情報構造を模式化すると、次の (32 a) ではなく、(32 b) のようになるものである。

(32)　a．[the sun] [rises in the east]
　　b．[the sun rises] [in the east]

(32 b) は「日の出はどの方角で起こるか」という問いに対する応答で、「日の出は、東で起こる」というものである[21]。

(32 b) は次の (33) の下線部の表現と同義である。

(33)　In the spring, <u>the sunrise is in the east</u>, and as summer comes on, its place on the horizon moves, at first quickly, and then more slowly towards the north.

それでは from に「起点」と「継続」の 2 つの意味のどちらかでも欠く用法はけっしてないかというと、やや検討を要する例がないわけではない。

---

[20] 動詞の特性が文全体の意味によって変容することについては、梶田優 (1968)「意味の化合」『英語文学世界』1968年 8 月号（梶田 (1976)『変形文法理論の軌跡』大修館に再録）および安井泉 (1985)「意味の化合―完成動詞・達成動詞・動作動詞との間」『英語の文法と理論』（筑波大学）を参照。

次の（34）の用例を見てみることにしよう。

（34）　a．Pork is meat from a pig, usually fresh and not smoked or salted.
　　b．Remove the bowl from the ice and stir in the cream.

（34 a）はコウビルド辞典における pork の定義文である。meat from a pig となっているところが目を引く。日本語では「豚の肉」としか訳しようがないが、from に、豚の本体から切り離されても依然として豚としての素性が継承されていることがよく表されている。

（34 b）の場合も、氷水からボウルを取り出すといっているのであるから、物理的には分離があるのだが、ここで重要なことは、the cream の解釈である。この文におけるクリームは、「氷水で冷やした、冷たい状態のクリーム」である。ここにおいても、もっとも中核的な状態の継続性が保たれていることがわかる[22]。

以上で from の原義の検討を終わる。これで work from home の意味分析の準備が整った。

from は「起点」と「継続」の２つの意を同時に持つありさまを表す前置詞である。work from home とは、「自宅で仕事を始め、その状態が自宅から離れない」ことを表す。ゆえに「在宅勤務」である。もちろん、自宅ではなくカフェあたりでパソコン片手に仕事をするのでもかまわない。職場に行くとなると自宅から完全に切り離されることになるが、カフェに陣取ることは自宅の延長にすぎない。要は、仕事の状態が本質的な点で自宅につながっていればよいのである。work from home は、一見、英語と日本語がつながりにくい表現であるが、意外にも、構成要素の意味をそのまま投射した表現なのである。

５．Base camp is as about as high as most of them will go. の意味について

表題の表現は、as...as... の前に about が付いたものである。この表現の変異形としてさ

---

[21] これに加えて、from が示す起点が狭い範囲のものであることも考慮に入れるべきであろう。「東」といってもピンポイントで「そこ」と指さすことができるわけではなく、そのような広い範囲は from の起点にはならないようである。ただし、from the east という表現が存在しないと言っているのではない。『マタイによる福音書』（英語訳）の「東方の三博士」の記述に from the east という表現が用いられている。

Now when Jesus was born in Bethlehem of Judaea in the days of Herod the king, behold, there came wise men from the east to Jerusalem.（イエスがヘロデ王の御代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、東方から博士たちがエルサレムにやってきた）

聖書はこの the east について立ち入った記述をしていないが、エルサレムから見た東というと、ペルシャのみならずエジプト北部なども含む広範囲な領域を指すものの、この「東方」は「東方のどこかの国」を意識していたものであると思われる。このような狭めた意味合いでなら from the east という言い方に問題はない。

[22] die of が死の直接的な内因を表すのにたいして die from が疲労などの間接的な外因を表すとされているが、これも、「離れても原点からの継続性を維持する」というfromの原義があらわれたものであると解することができる。

らにもう一つ as が付いて、as about as ...as... と as が 3 つある形もある。表題の文はこちらの変異形を用いている。どちらであってもさしあたっては基本的な意味のちがいはないようなので、以下では about as...as... の基本形にもとづいてこの表現の意味を論ずることにする。

この表現について、たとえば『ジーニアス英和辞典』は次の（35）の用例と日本語訳を掲げている。

（35） This tree is about as high as that one.（この木はあの木とほぼ同じ高さだ）

as...as... が「同じ（くらい）」で、about が「およそ」だから、「ほぼ同じ」ということらしい。が、この日本語訳に倣って解釈しようとしてもうまく解釈できない用例が多く存在する。

次の用例を見てみることにしよう。

（36） a . In those days you had to get by with ordinary painkillers which were about as effective as a slug of brandy to a man having his leg amputated.
b . Mrs. Sharptongue has about as much tact as a bull in a china shop.

（36 a）は、昔の痛み止めが、足の切断手術を受けている人にブランデーを一杯飲ませるのと変わらない程度の効き目しかなかったということを述べているものである。つまり、効き目といってもこの程度でしたということである。（36 b）は、シャープタング（舌鋒）夫人の思いやりの心は瀬戸物屋で暴れている雄牛に負けていない、つまり「がさつな人」であるということを述べている。いずれも、「効き目」とか「思いやり」がないわけではないが、あってもこの程度ですと、おとしめているのである。

このような用例にもとづくと、about as α as... という表現には、α の程度を最小に押し下げることを表す用法もあるということになってくるであろう。つまり、about as α as... は、「α を直接否定することなく、そのじつ α であることを実質的に否定するに近い程度に低く見積もる」といった、かなり込み入った言い方としても用いられるということである。

このような込み入った意味合いはどこから生まれてくるのであろうか。as...as... 自体は「～に劣らない」の意であり[23]、ここに目新しいものはないように思われる。むしろ、反語的な意味を生じさせている要因は about にあると思われる[24]。

---

[23] as...as... の詳細な意味分析については久保田正人（2010）「英語学点描（３）」『言語文化論叢』（千葉大学言語教育センター）第 4 号、pp. 57-66を参照。この論文は、as...as... に「同じくらい」という日本語が適さないことを論証している。

[24]『ジーニアス英和辞典』は about の反語用法を載せているが、訳文からそれとわかる about as...as... の反語的な用例は載せていない。

about は OE の onbūtan（on（＝in）＋būtan（＝outside of））に由来する語彙で、意味するところは on or by the outside of（～のすぐ外側にある（に接している））である。そこから、対象となるものからの「ズレの小ささ」の意が生まれる。これを「およそ」というぼんやりした日本語で表すのも、文脈によっては問題がない場合もあるが、ここではむしろ「ズレの小ささ」「程度の小ささ」の意が前面に押し出されたものであると考えるほうがよいであろう。

about の意味を鮮明に引き出すには、意味の中核を絞り出す just という副詞を加えてみればよい。次の例文を見てみることにしよう。

（37） a．We've got just about enough time to get there.
　　 b．I am just about ready.

（37 a）の文は、時間内にしかるべき場所に到着できることを表しているが、同時に、just about によって、時間に余裕がないことを強調している。つまり enough time といっても「ぎりぎり」というのである。（37 b）の文は「あともう少しでしたくができます」という意である。この場合、まだしたくができていない。そうすると、just によって引き出された about の意味は、目標となる概念に達している場合も、達していない場合も、そのズレの度合いがきわめて小さいことを表すところにあるといってよいであろう。be about to do という表現が「いま、まさに、～しようとしている」という直近の未来を表すのも、about をもっとも本来的な意味で用いているからである。

その about が as...as... を修飾しているのである。この場合、about は具体的にどこにかかっているのであろうか。これまでの用例では as...as に挟まれた α を強調しているとしてきたが、正確には、「as α as β」全体にかかっているというべきものである。たとえば既出（36）の 2 つの用例とも、「足の切断手術を受けている人にブランデーを一杯飲ませる程度の効き目しかない」（36 a）、「瀬戸物屋で暴れている雄牛程度の思いやりしかない」（36 b）というのであるから、effective や tact の程度を最小化するだけではなく、その最小化の具体的な目標値として、とんでもない内容を持ち出して、聞き手を驚かせているのである。痛み止めといって、ブランデー一杯による酔いを出し、思いやりといって、瀬戸物屋で暴れている雄牛を出されれば、聞き手は驚くしかないであろう。そのギャップの大きさを about という極小を強調する表現で表すという芸当をしているのが、この表現である。

念のため、ほかの用例もいくつか見てみることにしよう。

（38） a．Legends describe them as small people as about as high as a man's knee.
　　 b．The likelihood of life beginning by chance is about as great as a hurricane blowing through a scrap yard and assembling a Rolls-Royce.
　　 c．Ken Livingstone, about as cuddly as a tarantula, appears to have been

stitched up by Tony.

（38 a）の文では、前半に small people とあり、（as）about as high as が続くのは順当である。また、as の次に来る形容詞が tall ではなく high である点に注意したい。tall は下から見上げたときに用いる形容詞であり、high は上から見下ろしたときに用いるものである。「膝の高さ」は、通例、上から見下ろすものであるから、「低い」「小さい」の意とつながる。（38 b）の文は、生命が偶然に生まれる確率を、スクラップ置き場に台風が来て、風で飛ばされたスクラップが寄せ集まってロールスロイス一台が組み上がる程度だ（つまり、ほとんどありえない）としている。確率の大きさ（great）もその程度であるということである。（38 c）の文は、ケン・リビングストン（イギリスの政治家、暴言で物議を醸すことが少なくない）を、「抱きしめたいだろ、タランチュラに負けないくらいに」と揶揄しているものである。Tony はイギリス首相だったアンソニー・ブレアのこと。いずれも、as...as に続く内容にだれもが驚く意外なものごとを配置しているところに、この表現の真骨頂がある。

ここで表題の文に戻ろう。この文は NASA の職員が実験のためにエベレストに登ることを述べている文章に登場する。

（39） That means they'll gain some altitude daily, then descend a bit and spend the night at a slightly lower altitude to adjust to the reduced oxygen levels gradually. They'll do this vertical zig-zagging more than once. Base camp is as about as high as most of them will go, but this special strategy is still essential.（"NASA Heads up Mt. Everest" NASA から配信された 2009/ 4 /10 付の記事）

エベレストを登攀するには、毎日少しずつ高度を上げていき、上がっては少し下がるという上下のジグザグを繰り返すとあってから、表題の文が続く。

（40） Base camp is as about as high as most of them will go, but this special strategy is still essential.

「ベースキャンプは登攀者のほとんどが行ける程度の高さにある（が、そこに到達するのにも高度順応の作業を欠かすわけにはいかない）」というものである。エベレスト登山のベースキャンプというと、通例、4,000 m 前後の高度にあるが、8,000 m を超える山の高さからすれば、「高いといっても、たいていの人が行ける程度の高さ」でしかない。つまり、たいした高さではないということである。

このような反語的な意味合いは、程度の小ささを強調する about を α の前に置き、それに続いて、ふつうなら α と相容れないような内容を文末に置くことによって生み出されるものである。「α といってもたいしたことはありません。～の程度ですから」というのが、

この表現の表す意味である。

以上でこの項目の本論を終える。以下、査読委員のお一人からいただいたコメントに答えようと思う。それは、about as...as... に「字句どおり」の（つまり about を「ほぼ」と解する）解釈もあるのではないかというものである。『ジーニアス英和辞典』が既出（35）の例文に付けた日本語訳がそれに該当する。

（41）（=（35））This tree is about as high as that one.（この木はあの木とほぼ同じ高さだ）

これまでの議論にもとづくと、この用例でも「せいぜいあの木ぐらいの高さしかない」（つまり、低い）の意味合いがあってよさそうであるが、添付されている日本語訳からはそのような意は読み取れない。しかし、このくらいの解釈も可能ではないのかという主旨の指摘である。

この構文が字句どおりに解釈される場合があっても特段差し支えない。反語といっても程度の問題であり、about as much tact as a bull in a china shop（瀬戸物屋で暴れている雄牛に劣らぬ、やさしい思いやりの心）のように、落差の大きな表現が対比させられている場合は反語の程度も大きく、そうでない場合は反語の程度も小さいからである。

次の文章を見てみることにしよう。下線を引いた 2 箇所に about as...as... が出てくる。

（42） While she stood looking eagerly at the strange and beautiful sights, she noticed coming toward her a group of the queerest people she had ever seen. They were not as big as the grown folk she had always been used to; but neither were they very small. <u>In fact, they seemed about as tall as Dorothy, who was a well-grown child for her age,</u> although they were, so far as looks go, many years older.
Three were men and one a woman, and all were oddly dressed. They wore round hats that rose to a small point a foot above their heads, with little bells around the brims that tinkled sweetly as they moved. The hats of the men were blue; the little woman's hat was white, and she wore a white gown that hung in pleats from her shoulders. Over it were sprinkled little stars that glistened in the sun like diamonds. The men were dressed in blue, of the same shade as their hats, and wore well-polished boots with a deep roll of blue at the tops. <u>The men, Dorothy thought, were about as old as Uncle Henry, for two of them had beards.</u> But the little woman was doubtless much older. Her face was covered with wrinkles, her hair was nearly white, and she walked rather stiffly.-L. Frank Baum, The *Wonderful Wizard of Oz*

第一の下線部の要旨は以下のとおりである。「もっと詳しく言うと、その人たちは、背の高さが、年の割には大柄な子どもであるドロシーを少し上回るくらいでした。」つまり

大人にしては小柄だったということである。第二の下線部の要旨は以下のとおりである。「その男の人たちはヘンリーおじさんと年格好があまり変わらないとドロシーは思いました。というのも、（おじさんと同じく）髭を生やしていたからです。」こちらの方は特に反語的というのではなさそうにみえる。

このような例もあるから、(35) の用例に字句どおりの解釈があっても差し支えない。ただ、as...as... は「～にすぐるとも劣らない」の意であるから、それを「同じ（くらい）」の意に解するのはぞんざいな言葉の使い方であり、そこに「ほぼ」の意で about をかぶせるのは、さらにぞんざいさに輪をかけることになる。そのような漠然とした意味を表すのであれば、about the same のような言い方を用いればよいのである。

ある表現 E に他の表現にない特有の意味がある場合、用いようと思えば用いることができた他の表現を用いずに、E の表現を用いた場合は、E に特有の意味を意図していたと解釈するのがふつうであろう。その点で、about as...as... は、反語的な意で用い、また反語的に解するのが、無標の使い方であるといってよいのではないかと思われる。

6．最後に

以上、英語学習者であればたいていの人が首をかしげたことのある「不思議な英語表現」のからくりを見てきた。どれをとっても、それぞれがもっと大きな論文になる内容のものであるが、本稿は、英語を教える立場の方々および英語をもっと深く学びたいと思っている方々のために、そのエッセンスをコンパクトにまとめて解説したものである。